

は主に Type II, 睪丸, 脳は主に Type III の脱ヨード酵素があると考えられる。各臓器におけるシマリスの脱ヨード酵素活性の分布はラットの臓器分布とほぼ一致し質的な差は見られなかったが, シマリスの肝臓, 腎臓の Type I 脱ヨード酵素の活性はラットより低かった。

## 7. 咽喉頭異常感をきたした疾患の検討

(第二病院耳鼻咽喉科)

高野信也・荒牧 元・新井寧子・  
嘉和知直美・上田範子・岡村由美子

最近, 咽喉頭異常感は耳鼻咽喉科を初診する患者のなかでも多くみかけられるようになった症状の一つである。その原因には鼻アレルギー等の鼻疾患や咽頭, 喉頭, 甲状腺, 気管, 食道, 全身疾患や胃疾患等の多岐にわたり, その原因を特定するには多種の検査が必要になってくる。今回我々は咽喉頭異常感症例の症状からその原因部位の推定が可能かを検討し, 多少の知見を得たので, 文献的考察を加えて報告する。

[対象]1993年1月から1996年12月までに東京女子医科大学附属第二病院耳鼻咽喉科を咽喉頭の異常感を訴えて初診した器質的疾患を特定しえた483例と器質的疾患を特定できなかった327例の810例である。なお, 症状は1995年咽喉頭異常感症研究会世話人会による咽喉頭異常感症診療指針(案)に基づいて症状を原因疾患群別に分類した。

[結果および考察]異物感を主訴とした症例では, 男性で60%, 女性で50%の症例で器質的疾患を認めた。そして, 器質的疾患の有無にかかわらず異物感を訴える症例は40から50歳に多かった。器質的疾患を認めない症例では, 女性が男性の2倍と多く認められた。しかし, 器質的疾患を認めた症例では, 男女差を認めなかった。器質的疾患としては中咽頭疾患が多く, 炎症性疾患が多く認められた。嚥下時の症状は食道疾患と頸椎疾患で多く認められた。特に, 固形物の嚥下時に伴う異物感は下咽頭および食道の精査が必要である。

## 8. 高感度 TSH 測定法の臨床的検討

(ラジオアイソトープ検査科)

山口伸之・小田桐恵美・出村黎子

[目的] 第三世代超高感度測定法による TSH 測定の臨床的有用性について従来の IRMA 法と対比して検討した。

[対象および方法] 超高感度 TSH 測定法として「DPC・イムライズ HS-TSH」を用い, 各種甲状腺疾患の血清および下垂体疾患の TRH 負荷試験後血清に

ついて測定を行った。

[結果] 本法の最小検出感度は $0.002\mu\text{U/ml}$  で従来の IRMA 法の $0.1\mu\text{U/ml}$  に比較して極めて高く, 正常範囲は $0.4\sim 4.06\mu\text{U/ml}$  で, IRMA 法の $0.2\sim 4.0\mu\text{U/ml}$  とほぼ一致していた。IRMA 法による TSH が測定感度以下であったバセドウ病では134検体中92検体, 中毒期の亜急性甲状腺炎, 手術後の甲状腺癌および甲状腺腺腫では本法によってすべて測定が可能であった。バセドウ病患者の薬物治療経過では, 12例中6例で IRMA 法よりも3~16週早期に TSH の上昇が確認された。手術後 TSH 抑制療法のため甲状腺ホルモン投与中の分化型甲状腺癌2例の TSH は, IRMA 法では常に測定感度以下であったが, 本法によれば $0.005\sim 0.068\mu\text{U/ml}$  の範囲で変動を認め, 経過観察期間を通し測定が可能であった。下垂体疾患でも本法による TSH 基礎値の測定は, TRH 試験による分泌予備能をよく反映していた。

[結語] 本法は測定感度が極めて高く, TSH 分泌の抑制の程度を知ることができ, 下垂体-甲状腺疾患などの診断および治療経過の観察に有用であった。

## 9. 血漿レプチン濃度の臨床的意義に関する検討

(第二内科学)

三品直子・

成瀬清子・安達千佳・田部井由実・

吉本貴宣・成瀬光栄・出村 博

[目的] 肥満蛋白レプチンの臨床的意義を考察する。

[方法] 男性38名, 女性166名(妊婦90名)を対象に血漿レプチン濃度および体脂肪率を測定, 両者の関係を検討した。

[結果]  $18 < \text{BMI} < 25$  の場合はレプチン濃度は女性が有意に高い。また同濃度は BMI, 体脂肪率と正相関を示すが, 加齢による変化は見られず, BMI 不変の同一人物では日差変動は認められなかった。急性の生理的, 非生理的インスリン血症では変動はなく, 妊娠時には, BMI との相関を示さなかった。

[考案] 血漿レプチン濃度には性差があり, 体脂肪率とは良好な相関を示す。以上より, 同濃度は体脂肪量の定量的な指標となることが示唆された。

## 10. 高血圧における血管壁 Heme Oxygenase (HO)/Carbon Monoxide (CO) 合成系の病態生理学的意義

(第二内科学)

関 敏郎・成瀬光栄・

成瀬清子・吉本貴宣・田辺晶代・

関 昌美・安達千佳・田部井由実・

曾 正陪・出村黎子・出村 博